

「県民と県議会との意見交換会」 久慈会場 の概要

- 〔日 時〕 平成29年4月27日（木）18：30～20：50
〔場 所〕 久慈地区合同庁舎 6階 大会議室
〔テーマ〕 「安心して子供を産み育てることができる環境整備について」
〔参加者〕 （9名）
竹 下 敏 光（竹下産婦人科医院 院長）
外 館 幸 子（岩手県立久慈病院 総看護師長）
千 葉 勝 子（岩手県立久慈病院 看護師長補佐）
神 田 江利子（久慈市社会福祉協議会 生活支援課長）
石 原 潤太郎（久慈市縁結び支援員 サブリーダー）
青 澤 学（洋野町社会福祉協議会 事務局長）
金 澤 保 子（洋野町健康増進課 副主幹）
大 沢 洋 晃（野田村住民福祉課 主事）
佐々木 文 加（普代村保健センター 保健師）

- 〔出席議員〕 （8名）
千葉絢子議員、軽石義則議員、柳村一議員、嵯峨耆朗議員、城内よしひこ議員、
中平均議員、千田美津子議員、小西和子議員
〔事務局職員〕（6名）

◆ 参加者自己紹介及び現在の業務や活動状況の紹介

○竹下さん

私は産婦人科医をはじめて40年になる。久慈市では32年間、竹下産婦人科医院を開業して26年間お産を扱ってきたが、去年の今頃に高齢ということでお産の扱いを辞めた。

これまでに取り上げたお子さんは約15,000人になる。その中で竹下産婦人科での産数は約8,500人となる。

お産というのは数だけではなく、大切なのは医学的に安全であるということ。妊娠経過中にずっと異常無しできていても、突然に異常が出ることがある。緊急の帝王切開をする等、様々なことを迅速にやらなくてはいけないが、遠くに搬送する時間が無いときもあり、地元でしっかりと対応できれば良いと考える。

二戸病院に集約化ということで、産婦人科医が少なくなったため、現状、遠くに搬送せざるを得ない状況にある。盛岡の中であれば集約化は可能かもしれないが、久慈と二戸では距離が遠く、同じ医療圏と考えるのはおかしいと思う。できるだけ地元で完結できるよう、久慈病院も医師を複数化して産婦人科の治療をできれば良いと思う。

○外館さん

久慈病院に勤め4月で3年目になった。久慈病院から看護師長補佐と2人來ているので2人分の時間をいただき、5分程話をしたい。

事前にいただいた案内の「ウ」の所に「地域における周産期医療体制の現状及び課題」というテーマがあるので、久慈病院としてお話をしたい。

まず、現状と周産期医療体制の整備について、平成 27 年から、竹下先生がお産の取扱いをお辞めになってから、久慈病院としてどのような体制としていくか話し合いを進めてきたのでお話する。

分娩件数については、平成 27 年度は年間 72 件、平成 28 年度は 2.5 倍の 182 件となっている。また、妊婦健診も 1.9 倍になっている。助産師の数は平成 27 年度では 12 名であったが、分娩件数が約 2 倍以上に増えるということで、医療局へ要望をして 12 名から 17 名に増やしていただき頑張っている。

周産期医療体制の整備について 5 つにまとめた。

まず 1 つは、院内の体制として周産期医療体制検討委員会を立ち上げた。メンバーは院長と私を含め、産科・小児科医師や助産師、医事課、管財で構成。まず、ここ数年間分娩件数が少なくなっていたので、産科・小児科で使う医療機器の整備に関する話し合いから始めた。また、妊婦健診の予約の増加により外来の体制を強化、そして、助産師外来を今後復活していくため、院内の整備体制について話し合いを行ってきた。

助産師のスキルアップについては、アドバンス助産師というものがあるので、アドバンス助産師を育成し、現在 4 名認証されている。

新生児蘇生法に関しては、助産師も看護師も研修を受講し、認定者を増やす取り組みを行っている。

母親教室は月 1 回から 2 回に増やしている。

院内の産科救急研修会を開催している。久慈病院では産婦人科医師が 1 人しかいないため帝王切開には対応できない。ただ、いつ何が起こるかかわからないことから、超緊急帝王切開術が行われるときに、院内にどのような体制をとるべきか、そして、麻酔科が常勤していないので、そういった場合には麻酔について外科の先生にお願いすることとなるなど、産婦人科、小児科、外科、助産師、看護師、手術室の看護師、薬剤師、臨床検査技師の皆でチームを組んでシミュレーションを行った。

平成 29 年度は産婦人科医師の業務負担軽減のために、臨床検査技師が胎児エコーを行えるように研修を受ける予定である。

二戸病院との連携について、分娩件数が少ない時に新人助産師が当院に配置になると、なかなかスキルアップができない。そこで、平成 26 年度から二戸病院と連携し、月単位で新人助産師を二戸病院に派遣し研修を行っている。さらに助産師だけではなく看護師の新生児の看護研修も行っている。助産師の研修は、久慈病院だと帝王切開等がないので、帝王切開や吸引分娩などへの対応の経験をさせている。

妊産婦のデータベースの連携で「ハローベビー」というものがある。

産婦人科の医師は二戸病院におり、久慈病院に 1 週間単位で 1 人が交替で来るという体制。

保健所の各市町村との連携については、平成 27 年度から保健所にお願いし、行政と病院との話し合いをさせていただいた。

平成 27 年は 9 月と 12 月、平成 28 年は 2 月と 8 月に久慈地域母子保健・医療関係者連絡会として、妊産婦の支援策の情報公開や課題について話し合いをした。

平成 28 年度からは、ハイリスク妊婦の市外医療機関での妊婦健診について、久慈病院ではなく二戸病院へ行かなければならない時の交通費の一部助成や、出産へ付き添いする者が宿泊する際の一部助成などについて、各市町村で話し合いのうえ取り組みを開始している。

母子健康手帳について、久慈市は「元気の泉」と久慈市役所に別れているが、保健師は「元気の泉」にいるが、手帳の交付は市役所で行っていた。市役所で交付しては妊婦さんに保健指

導をする機会が無いことから、母子健康手帳を交付する際に保健指導をしていただきたいということで話し合いをし、平成 28 年 8 月からは母子健康手帳を保健師が交付のうえ保健指導を行うようにしていただいた。

周産期医療情報ネットワークの「イーハトープ」というものがあり、それを市町村で登録していただき情報共有している。

平成 29 年 3 月 1 日には、久慈市長から助産師との懇談会を行いたいと要請があり実施した。久慈病院の助産師と地域の保健師と連携を密にして、特に、妊産婦と新生児の事例検討会を行いたい旨の要望し、今年度は定期開催できるように話し合いを進めている。

その他、いざ出産時だけのことではなく、常に正常な出産を取り扱うためには、子供の頃からの健康づくりが重要であるが、今は高齢者とか認知症とかがクローズアップされており、病院の中にいる助産師だけでは対応が難しいことから、母子保健に保健師の方々も手を掛けられないようなマンパワー不足があると思う。

こういう機会テーマとするのであれば、市町村の保健師の方々も不足していることがあげられると思うし、思春期教育、性教育もこの地域の中で行わなければならないと感じている。

産婦人科の医師が不足しているが、2人や3人に増員して欲しいというのは現実なかなか無理である。私も助産師だが、産婦人科の医師が不足であることから、特に助産師の確保と定着が重要な課題だと思う。私は県立病院の職員だが、県立病院の助産師は応募が少なく、定数に満たない現状もある。あと数年後、県立病院の場合は助産師の定年者数と確保との均衡が大きく崩れることが危惧される。

沿岸部は周産期医療を県立病院が担っている現状であり、岩手県にとって今後大きな課題であると思う。そこをどうすればよいか日々悩んでいる。市民の方々に正しい情報を伝え、過剰な不安は煽らないようにしたいと思うが、それは久慈病院だけではできない。県議会議員もいらっしやるので、情報を正しく伝えていただき、只々不安を煽らず、医師を増やすのは現実無理なので、少ない中でどうしていくかを話し合い、医師、助産師とも頑張っているのご理解いただきたい。

○千葉さん

去年、久慈病院に転勤してきた。その前もずっと沿岸勤務であったが、沿岸地区での周産期というのは大変である。その中でも特に久慈病院が大変だと日々感じている。少しでも良い環境でお母さんや家族の方々が安心して出産できるような環境を作っていきたいと思う。

○神田さん

当協議会では、地域子育て支援拠点事業の一環で久慈市から委託を受け、子育て親子の交流の場である「しあわせSUNつどいの広場」の運営を行っている。

広場は中心商店街にあり、空き店舗を活用している。同じく当協議会で運営している老人デイサービスに隣接しており、子育て親子の交流の場だけでなく、高齢者との世代間交流も行い、地域福祉の拠点として活動している。

平成 17 年 2 月 1 日に開所して 12 年が経過した。休業日が火曜日で、週 6 日午前 9 時 30 分から午後 5 時まで開所している。保育士と子育て相談員を配置して、随時の子育て相談や毎月の各種行事を開催し、交流の場の提供の他に子育てに関する相談、援助、関連情報の提供を行っている。

例年、年間約 12,000 人の延べ利用者数である。昨年は台風 10 号被害の影響で 3 週間休業したため、例年の 7 割程度の利用者となったが、現在は例年どおりの利用状況に戻つつある。

利用される方々は、お母さんとお子さんとで来ることが多いが、ここ 3、4 年前から、お父さんとお子さん、祖母とお子さんといった組み合わせで来ることが増えてきた。

お母さんが社会進出し仕事をする家庭が増えている傾向と思われる。

ハローワークと連携し、子育て世代を対象としている求人票の掲示や、就労相談員と連絡を取れる体制を作っている。

毎月、子育て相談会を開催している。近年の相談内容の傾向としては、子供の発達やしつけに関する相談が多い。その要因を紐解くと、夫婦、嫁姑の関係、人間関係など、母親自体の悩みが根底にあるのではないかと感じている。それらが子供の発育に何らかの影響を与えていると考えている。最初は子供についての話をするが、徐々に夫婦間の話になっていき、感情的に涙を流す場面もみられる。

当事業所としては主に子育てをしている母親の精神面への援助が子育て支援に必要ではないかと考える。具体的解決策はみつからないが、胸の内の思いを聞くことが大事だと各職員心がけて接している。

○石原さん

久慈市縁結び支援員は、久慈市の子育て支援課が2年前から始めた事業である。

結婚を望む男女から申込みを募り、面談をして、おのおの情報を縁結び支援員がマッチングを行い、条件や人柄など色々な印象を考慮し、昔で言うお見合いという形にするという流れである。

久慈市では女性の申込みが少なく、かつ男性の申込みが40代、50代以上がとて多い状況である。先月時点でマッチングを行った結果、結婚までいった件数はゼロとなっている。

支援員は10数名いるが、メンバーは60代70代の女性を中心に、おのおの居住される地区では信頼されている素晴らしい方々だが、プライバシーを慎重に扱う必要があるため、地域で踏み込んだ活動も難しく、どちらかという受動的な活動となりがちである。

支援を望む方は、仕事が忙しかったり、性格が大人しかったりなどいろいろあるが、実際に面談すると1人1人魅力的な方々ばかりである。そうした人に様々な出会いの場を提案、創出することは、細分化した対応が必要であると思われる。

例えば、別の50代の男性から、孤独に死にたくなく結婚をしたいという言葉聞いた。出生率とか婚姻率だけの問題ではなく、幅広く連携が必要な事業と感じている。

今年度は、久慈市は、縁結び支援に申込み、岩手県のIサポにも申込まれている場合の助成など、細々した新規の対策をとるようだ。皆さんの意見も参考にしたい。

○青澤さん

当協議会では、2年程前から婚活事業に取り組んでいる。

当初は社会福祉協議会で事業をするとは思っていなかったが、4、5年前に福祉懇談会を地区で開催したところ、多くの地区で、「高齢者福祉も大事だが地域をみると独身の男女が多くなってきている」、「うちの娘、息子も30代、40代になるが結婚していない」、「将来を考えると不安があるので、社会福祉協議会でも考えてくれないか」との話があり、何か考えなくてはと思い、最初は視察研修等も行った。

平成27年度から、洋野町で出会い支援事業を実施することになり、社会福祉協議会が委託を受け平成27年度、28年度の2年間実施してきた。

最初の年は事業を進めるための推進委員会の組織や、独身の意識調査等を行い、一番のメインとして婚活イベントの開催に取り組んできた。

平成27年度のイベントについては、平成27年1月31日に八戸市で開催した。男性は洋野町限定で28名参加。女性は全国区でどこからでも良いということで募集したところ19名集まり、併せて47名の参加となった。女性を集めることが難しく、他では女性が集まらずイベントがキャンセルになった例もあったと聞くが、何とか開催でき、結果7組のカップルができた。7組のうち

1組が、春にはお見合いして、夏には結婚し、今年の12月に女の子の赤ちゃんが生まれた。事業そのものが、少子化の要因である未婚化・晩婚化の進行に歯止めをかけることが大きな目的だったが、確実に洋野町の人口が1人増えたということで役場も成果が上がり喜んでいいる。

平成28年度の事業については、今年の1月22日に八戸市で開催し、男性18人女性16人の計34人の参加で7組のカップルが誕生した。追跡調査アンケートを5月に行い確認する予定だが、できれば1組でも2組でも交際が続いていればと思う。

数年は事業を続けたいという話もあるが、それなりに経費もかかり、洋野町の支援がないと社会福祉協議会単独では難しいことから不安に思っている。さきほど話したとおり、女性の参加者を集めるのが難しい。半分以上が地元の方であるが、残り約3割が八戸市から参加いただいているし、あとは軽米町や階上町から参加いただいている。将来的には久慈広域で連携とりながら実施するにより効果的と考える。社会福祉協議会単独での実施は難しいとされている。

カップルになり、結婚までいくと最高だが、そこまでいなくてもこういう事業はいろいろな所で開催していくべきと考える。都市部では様々な団体があり機会が多いが、田舎になると機会が少ない。そのようなことから、推進委員会を通じて町内の関係機関・団体に呼びかけをしたところ、平成28年度から地元の商工会でも開催するようになり、大変良いとされている。このような機会を作らないと、チャンスが年に1回しかないことになるので、連携をとりいろいろな団体で取り組んでいただければと思う。

最後に、平成27年度にアンケートをとったところ、様々な考えがあり、中には心が折れる話もあった。今の独身の男女はいろいろな考えがあるので紹介したい。「結婚に利があれば、自然と結婚を選ぶと思う。結婚、生活、子育てと社会的負担の割に見返りが少ないと感じる。その先に幸せといえる生活はあるのか。ゴールが不安視されるので二の足を踏んでしまった」という内容であった。

結婚に対するイメージが良くないと感じた。後は、「イベントの機会が少なく増やして欲しい」という意見もあったので社会福祉協議会として考えていきたい。

専門家から調査内容を分析していただいた。独身の方々が求めているのは街コンを久慈広域で開催して、情報提供していくというもの。イベントだと構えてしまうので、街コンのように気楽に参加できる機会を増やして欲しい。岩手県内各地の婚活イベントの情報、Iサポもあるが、そういった情報の提供も必要。

基本的に仕事、子育て、介護、いろいろな部分があり、安心感、結婚しても安心して子供を産み育てていける環境をつくらないと婚活は上手くいかないと思う。併せて、若い人の仕事も関係しており、結婚したいが経済的に厳しいという意見がある。総合的に考えていかないと前に進まないと思う。

○金澤さん

保健師で母子保健事業を担当している。洋野町は人口が約17,000人。合併して10年だが平成18年は出生数が130人だったが、平成28年は76人であり、ここ10年で少子化が進んでおり問題と考えている。

状況を分析すると、76人の中でも第2子、3子、4子という方もいるので、合計特殊出生率は県平均より高い状況である。少ないということは、産む、産める方が少ないと思われる。

先ほど久慈病院の出産の状況の話もあったが、洋野町は県境なので、産む場所の50%近くが八戸市内の医療機関に行っている。今年の状況では3割位が久慈市と二戸市である。

二戸病院を利用した方には洋野町としても交通費の助成をしており、平成28年度は4件の助成をした。内容をみると帝王切開が必要で二戸病院に行った方が多かった。

お産した後の赤ちゃん訪問や乳児健診等でお母さん達と会う機会があり状況を聞くと、八戸市

まで時間はかかるし、洋野町から久慈市や二戸市までは遠いとお母さん達は感じている。地元とか久慈付近で安心してできればという声も聞く。

母子保健事業において、保健師は母子健康手帳を交付する時からお母さん達と話をしている。

産んでからきめ細やかに全戸の赤ちゃんを訪問する。3か月、6か月健診、2歳、3歳、学校に入ってというところまで時期を捉えて健診等をする。その中で、保健師だけではなく子育て支援センターの保育士や教育委員会の先生、様々な職種の方が協力し連携しながら子育ての支援を行っている。

洋野町で産み育てることに満足しているかというアンケートをとると、7～8割の方からは満足しているとの返答がある。中には「近くに子育て支援センターはあるが、そこまで行くのにも車で行かなければならないため、気軽に利用できる場所がもっと欲しい」、「若い世代は給料も少なく、子育てにお金もかかるので、乳児期から保育園に預けて仕事をしなくてはならない」との母親の意見も多い。

そういう方を応援するために受け入れをして待機児童も無いような状況にしている。支援を強化する必要があると感じている。

○大沢さん

主に児童福祉の部分の保育所、放課後児童クラブ、児童手当等を担当している。

野田村で実施している事業について紹介する。野田村で子育て支援で力をいれているのが保育料の無料化である。平成25年に3歳未満を無料化にし、平成28年からは第2子以降所得制限なしで無料にした。今後は完全無料化を目指していく。

また、小学校に入り放課後児童クラブを利用することになるが、新しい支援ではないが年間800円の保険料のみで村内2カ所を利用可能としている。

大学、大学院、専門学校に入ったときは村で奨学金を用意している。月額2万円や3万円を貸与するものであり、全国的に保育士、介護職員、看護師不足が叫ばれていることから、村に住み、村の事業所で働いた場合は奨学金を免除するといった制度を今年度から始めた。

保育料を無料にする動きをすすめているが、保育士不足は小さな村でも課題になっており、4月から入所する子供は受け入れたが、途中入所する子供達をどう受け入れるか、保育所からも課題として話題提供してもらっている。

昨日、岩手日報の記事に取り上げてもらったが、平成28年度から地方創生プロジェクトチームを役場で結成した。

役場は縦割りであり、横の繋がりがしにくい状況。それを解消するために、各課から若い職員を中心に選定し、野田村にとってどのような制度が必要か議論するプロジェクトチームを立ち上げた。

成果として、子育て支援の制度を紹介した子育て支援ブックを作った。他の地域と見比べても見劣りせず、良い制度もあるということチーム内で共有し、それをもっと前面に出していくということで支援ブックを作成した。

小さい村なので、できることも限られているが、その中でどういう支援ができるか常々考えながら、村民に満足してもらえるような村を作っていきたいと思っている。

○佐々木さん

母子保健についてと、私自身3人の子育てをしており、その立場から話をさせていただく。

母子保健については、さきほど金澤保健師からあった話と大きくは変わらないが、その中でも、普代村では妊娠届を提出に来た時が大事だと考える。その時に母親と直接面接をし、母親の表情や雰囲気、不安等を把握することとしている。他所からお嫁に来た方は、「周りに何があるのか」、

「どこに相談して良いかわからない」といった不安を持っており、初めての出産だけでも不安なので、少しでも軽減されれば良いと考えている。困った時には保健師に電話や相談にきていただくよう、母親との関係作りに力を入れるようにしている。

妊娠届が提出され数か月経ったら、妊婦に手紙を出し、保健師の存在をアピールしている。母親が役場に来たら、駆け寄って声を掛け、関係作りに力をいれている。そこがしっかりできればお産後の関わりがスムーズになると思っている。

普代村では出生数が少なく、平成27年度には10名を切っている。その後も減っていくかと思っていたが、14、5人までは増えてきているところである。

出生数が減る原因を考えると、まず、産める年齢の若い方々が少ないこと、また、1人目の出産が帝王切開となる方も結構多く、そうすると3人目迄となるためにもう産めないといった話を聞くこともある。

普代村からは病院が遠いが、前もって何かあったら二戸病院等の別な病院に行くということを知っており、遠くに行くことに対して大変という声はそれほど聞かれない。そのような不安を与えないように、イーハトーブ等と連携はできていると伝え、安心感を与えるようにしている。

病院側から気になる母親や子供について連絡をいただくこともあり、気づいていなかったことを教えていただいたり、こちらから心配な点についての情報をお願いしたりと連携が図られて心強く思っている。

皆さんは出会いがないと話をするが、果たして理由はそれだけなのかと思う。出会いの場はあるが、そういう場所に行かないという方も多い。人との関わりが苦手、どう関わっていいかわからない、また、休みの日は出かけないで家でゲームをしている20代、30代の方がいる。人と関わるのが楽しいということや、親御さんが結婚は楽しいということや、子供の頃から伝えることが大切だと思う。

◆ 意見交換

○千葉座長

今日、ご出席の皆様から現状についてのお話を頂いた。医療関係の先生からは環境が厳しいということ、結婚について出会いの場をどのように創出していくか、また、どうやって結婚に結びつけていくかなど、いろいろな問題提起があった。

それでは意見交換に移っていきますが、今までの話を伺って、議員の方から質問がありましたら発言をお願いしたい。

先ほど、佐々木さんからゲームの話が出たが、私の知り合いにゲームを通じて知り合い結婚した夫婦がいる。奥様が東京から来て、専業主婦。夫婦でゲームをしている。旦那は仕事から帰り、お惣菜とカップラーメンを食べてからゲームに参加をして1日が終わる。出会いの場が無いところから入っていったほうがよろしいか。少し前は適齢期になれば出会いがあり、ペアになり、結婚していくと私も思っていた。しかし、公的支援が入り、県の施設でIサポもでき、他の人達や公的機関がお膳立てをしなければ出会いさえできないといった現状になっているのかと思う。出会いの場をどのように作っていくかについて、議員の皆様いかがか。

○柳村議員

滝沢市でも、10年程前から出会いの場を商工会が企画して実施している。

先ほど石原さんから、40代と50代の男性が多いということで、適齢期を過ぎたが結婚したいという人はいると思うが、適齢期に自分が結婚したいかということ、そうではない方も多。結婚したい

方はどんどん参加するが、適齢期で、結婚できるのに行かないというように、ライフスタイルが変わってきているかと思う。若い人はいるが、結婚に関心がないという部分で、いかに結婚が大切なことか、最初の部分から話をしていかなければならないと感じる。出会いの場を作ったり、子育ての環境を良くしたり、周産期を良くしたり、対策をとっていてもきっかけの部分に対して行政がアイデンティティーを持ってやらないと大変ではないか。

現場サイドでミスマッチとなる部分があると思うが、困っていることはあるか。

〔回答：石原さん〕

以前、結婚式場で営業をしていた。結婚する本人同士、または親御さん同士の話を伺うのが仕事で、結婚する方は結構見てきた。この縁結び支援員になってからも、久慈市の商工会議所や青年会議所等の婚活のイベントのお手伝いもしてきたが、久慈市においては、婚活パーティーは基本的に人が集まらない現状である。人口が4万人ぐらいなので、お互いの顔がわかってしまう。

先ほど話を聞いていて、洋野町のすばらしいと思った点は、八戸市まで広げて実施していること。相手の対象に居住地域の限定をしないことが素晴らしいと思い聞いていた。婚活パーティーはその日1日だけのイベントであり、私が思うに、共通の趣味やスポーツ・文化的な活動、ボランティア活動など、行動している姿、生活している様子を見ないと女性は男性を選んでもくれないと思う。婚活パーティーの1日だけで、カップルが成立して結婚したことは素晴らしいと思うが、それは奇跡だと思う。

八幡平市が5年間連続で婚活パーティーをして1組結婚したという例もあるが、それが費用対効果という失礼だが久慈市においてはきびしいと思う。そういったことを考えると、例えば久慈市においては、昔であれば村祭りや盆踊りに参加したときに、男女が働く様子を見て、あの人はきちんとする人だということを見て交際を決めていた。今は同じ趣味嗜好が細分化した時代。都会では、例えばスポーツが好きな人、スポーツについて語るのが好きな男女を10人ずつ程度集めるイベント、いわゆる「サークル婚活」などがたくさんある。スポーツに限らず細分した個人の趣向に合わせて出会いの場がある。地方においても、この集まりにお嫁さんを探しにきたのではなく、例えば音楽が好きでこの集まりに来たといったエクスキューズを作ってあげることも大事であると思っている。

○千葉座長

出会いの場を周りが作るということが、今は当たり前になってしまっているのか。

〔回答：青澤さん〕

出会いの部分で話があったが、八戸市を選んでいるのには理由がある。独身男女からアンケートをとると、地元で開催すると知っている人がおり、参加しにくいとのこと。ここはデリケートな部分です。交通の便などを考慮し2年続けて八戸市を選んだ。

推進委員会には商工会関係者もおり、何十万円というお金を使うのであれば地元に落として欲しいという意見もあったが、地域の活性化と婚活は切り離して考えなければいけないという業者のアドバイスもあった。

カップルから結婚までいく確率は3%との統計がある。出会い支援事業では、2年続けて7組、併せて14組できた。継続していかないといけないと思う。

女性が集まりにくいことについては、3、4年目ぐらいに定着して安心感がでてくると、必然的に集まるようである。男性に関しては地元限定だが、1年目も2年目もチラシを配った程度で20人30人位集まっている。女性については、何もしないとほとんど集まらないのが現状。ちなみに1年目の自主的参加は2、3人だった。後は口コミでお願いし15人から20人集めた。2年目は

推進委員会の関係者で半分程集めてくれた。女性の参加者を集めていくのが難しいと感じている。

○千葉座長

カップルが結婚に至る確率が3%。そうすると7組中成婚1組となるとかなり高い。

〔回答：青澤さん〕

地元でも奇跡のカップルと言われている。女性も男性も知っていたが、まさかと思った。出会いはどこにあるのかわからないと思った。

○千葉座長

エリアを限定して、町内や市内だけとなると、デートするときにあそこに行ったなど、面倒くさいことになる。1つは外に門戸を広げて出会いの場を作る。それは公的な支援がないとできないことかもしれない。

○軽石議員

私は岩手県の青年の船に乗った経験があるが、青年の船は県内全域からいろいろな職種の方が集まったが、その中でカップルもでき、成婚率も高かった。1日の何時間かでお互いがわかり合えるというのは確率としては低く、ある程度の期間、一緒にいろいろな方と見て聞いて話す時間があれば、その中から付き合ったりする機会が増えると思う。

県議会でも青年の船を復活してはどうかと話しているが、今は海外には自由に行けるし、2週間休める会社は殆どないのが現状である。岩手県には港が多くあるので、2、3日の範囲内で、その期間にどこかの港から乗ってどこかの港で降りるといった船の活用も良いのではないかと思う。

また、場所を変えた方が参加する方も良いという声もあったが、そういう場の設定も市町村の皆さんだけでは実行できない行事だと思うので、県としても広めていくことを考えていてもらいたいと感じた。

女性の参加が少ないのは、地元での周りの目があるためということだが、人口が多いから人が集まるかということ、盛岡地域でも難しいことである。話を聞いてみると、職種や勤務の状況により休みが合わないとか、仕事が終わった後にお付き合いする体力が残ってないという声がある。そのように参加したいがそこまで至らないという理由は届いているか。

〔回答：青澤さん〕

今年の1月に開催した時、地元の特別養護老人ホーム勤務の女性が参加したが、「普段は業務に追われており、気にはするが参加したことはない。今回、背中を押されているいろいろな人と出会うことができよかった」との感想をいただいた。思いはあるが一步が踏み出せない。そこに誰かが背中を押してやる、手を引いてあげるといったものがあれば参加する人が増えると思う。

○軽石議員

昔は近所の母親や父親が、井戸端会議などで積極的に結びつけたりした。今はプライバシーやセクハラのこともあり、どこまでが許され、どこからが許されないのかといった線引きが難しい状況となっていると思う。そういった状況についてはどう思うか。

〔回答：石原さん〕

久慈市の縁結び支援員は、昔そういったお世話をやく方というか、町内の中で上手くまとめた方々。そのイメージで縁結び員にボランティアで参加していただいているが、若者の結婚に対する温度が低いので戸惑ってしまうと言っている。

公務員の方で第3子、第4子まで生んでいる方もたくさんいる。公務員の方の出生率はどうか。一般的な企業で、朝1時間、夕方1時間休めるといったことはすぐ許してもらえない。そういったことを許している会社をもっと褒めてアピールしてあげないとイメージダウンというか、民間でも大丈夫、ヘルプしてくれる、サポートしてくれるといった、保健師以外の援護射撃も必要だと思う。

○軽石議員

1人でいても生活するうえで苦勞がない。男女ともに幸せの価値観が違ってきているのかもしれない。家庭をつくることにより、子供の笑顔を見ると疲れが飛ぶという経験ができる。しかし、そこまでいっていないので、働く環境をもっと改善していく必要があると思う。

○千葉座長

運よく結婚する相手に出会ったとして、そこからどのように子供を産んで、生活していくというか、機運を高めていくかというか、動機に繋がる部分についても話を移していきたいと思う。

出産しようかと悩む年代のお母さん方の中で1番のニーズとは何なのか。職場環境なのか、若しくは預ける場所なのか、それとも産む施設なのか。どのあたりに女性が産もうという気に前向きになれない原因があると思われるか。

【回答：金澤さん】

最近、お母さん達と話をする中で、子供を産めば可愛く次も欲しいという話を聞くが、いろいろな面でお金がかかるという話も多い。どこの市町村でも医療費の無料化など様々なケアをしているが、それ以上に実際の生活となると、もっと金がかかるということを感じているのだと思う。そして、将来子供が大きくなった時に、高校や大学進学にお金がかかるなど、将来の不安を考えてしまう。今の給料で貯蓄してとなると、子供は1人でいいかな、2人でいいかなと考える人が多い。また、正規職員であれば産休や育休を取れるが、パートや臨時職員では妊娠と同時に制度がないため辞めるしかない。そうすると収入も減り、子供はもういいかなと思うお母さんもいる。

○千葉座長

2月の県議会の定例会で一般質問した際に調べた資料によると、県内の中小企業は38,000社以上あるが、その内12%の会社は育児休業制度が無い。それが一つ問題になっている部分もあると思う。

働くお母さんにとっては、子供を育てていくためには、お金が無いとやっていけない。ただ、育児休業制度が無いと産むこともできない。産むと決めたら会社を辞めなくてはならない。その中で悩むという部分がある。働いているお母さんの方が、ポテンシャルが高いというデータがある。いかに働きながら子供を育てていく女性の環境を整備していくかということが、民間企業も取り組まなくてはならない。

県では啓発とか普及までしかできないので、実行に移すためには民間企業とか中小企業とかに御協力いただきたいと考える。

○嵯峨議員

大きい規模の所なら、今言ったような制度があると思うが、久慈地域では中小企業が多いため、

制度の有無が大きな要因とはなっていないと思う。

○城内議員

宮古地域の重茂地区では、漁業で生計が成り立っており、高収入の世帯がたくさんある。

その地区は子供の数が減らない。漁師の方なので仕事は過酷だが、お嫁さんが来る。お嫁さんも働くし、おじいちゃん、おばあちゃんとも暮らしている。まれな地域だと思うが、皆さんよく働くし、お母さん方も連携して子育てをし、結構優秀な子がたくさん出ている。大学まで仕送りしてやれる位の家庭がたくさんある。

自分達が夜中に稼ぐときには、おじいちゃん、おばあちゃんが子供の面倒をみている。それが昔の原風景なのかなと思いつつ、それが今の時代にあるかどうかとなると別だが。

婚活をしなくても、飲みに行った時に出会ったりする。さらに友達の分のお嫁さんを見つけきて紹介もすることがあるなど、バイタリティーのある人が結婚できるのかなと思う。

○千葉座長

最近では岩手県の男性の未婚率が全国でもかなり高い。2位くらいのところにある。草食男子とか、ロールキャベツ男子とか、結婚しなくてもいいと思っている男性が増えている。

○嵯峨議員

給料等の経済的な要因が大きい気がする。結婚しても自分が家族の面倒をみるのが難しいため共稼ぎせざるを得ない。そういうところから見ていかないと、結婚と言っても現実的にならないと思う。

〔回答：青澤さん〕

調査結果がある。平成27年の結果で男性80人が対象であるが、200万円から250万円が一番多くて25人位、次が150万円から200万円が21人というのが男性の平均。女性は一番多い所が100万円から150万円が24人。150万円から200万円が14人ということで、男性でも300万円、400万円を超える人は少ない。これは手取りでの状況である。

○嵯峨議員

出産についてであるが、先程、いたずらに不安感を煽るのではなくという話をいただいたが、私は不安だと思う。地域で医療提供できないというのは大きな不安の要因だと思う。少しでも出産の体制を整え、安全、安心となるようにどのようにしていくのかが重要だと思っている。

〔回答：竹下さん〕

今の件ですが、不安感を与えるのはよくないが、絶対に安全というのはない。しかし、それに対応しなくてはならない。帝王切開のシミュレーションもしながら、頑張っているようでありがたいと思う。

以前は久慈病院に周産期センターがあった。久慈病院がメインの病院だった。なぜ二戸病院に集約したかということ盛岡市に近く便利だからということだと思うが、現実に必要なのは久慈地域である。どこに行くにも1時間以上かかるし、救急車で搬送は盛岡市まで行くこともあり、冬季は雪が降って更に時間がかかる。ここで完結というか、久慈病院に医師が2人、二戸病院にも2人という体制に是非お願いしたい。

○中平議員

竹下先生から話があったが、私も嵯峨議員も県議会で取り上げてきている。同じことを質問していると思われても、やはり続けて言っていないと駄目である。どっかで途切れてしまえば、もう久慈地域は大丈夫であると捉えられかねない。先程、助産師が今も定数に足りていないこと、今後、退職者の状況により、維持できなくなる可能性が高いという大きな問題提起をいただいた。そういった課題も含めながら、これは久慈地域だけの問題ではないので、今後どのようにしていくのか問題であると思う。

〔回答：竹下さん〕

県南に例えてみると、大船渡病院に産婦人科が1人しかおらず全部一関地域で帝王切開をしているという話になる。距離的にも考えられないので、両病院2人体制で良いと思う。

○嵯峨議員

竹下先生が言うように、久慈地域と二戸地域を一つの医療圏として考えること自体が間違っている。

〔回答：竹下さん〕

昨日、不妊症の特任教授から講義を受けた。岩手県は残念ながら不妊治療のレベルが少し低かったが、不妊症の専門医と指導医を持っている医師が岩手医大に教授としてきた。その医師が頑張っている良い体制を作ろうとしているので、ぜひみなさんも手を貸して欲しい。岩手医大にセンターみたいなものを作ろうとしている。精子が無い患者さんにも、精巣を切って精子を取り出し顕微授精できる。1つ2つ精子があればできる。そういう高度な事のできる先生がきている。培養する人達がいなくて、少しずつ岩手も良くなっている。

経費についても30万円から45万円に上がると聞いている。利用する方々の保険適応になれば一番良いが、国も医療費を安くしたいと思うので難しいと思う。県からのお力もいただきたい。

○千葉座長

そういった施設が無く、仙台市か青森県に行くのが不妊治療の現状であった。

〔回答：竹下さん〕

今度から岩手医大で全部できるようになるので大丈夫です。

○千葉座長

竹下先生、外館さんにお伺いしたい。なぜ産科医、助産師になろうとする方が少なくなっているのか、一番の理由を伺いたい。

〔回答：竹下さん〕

大野病院の訴訟です。妊産婦の死亡があり、結局無罪になったが、そういう事件があった。あとは、夜に起こされて寝ている時間が無いときもあるし、日曜日でもどこにも出掛けることができないなど大変である。ただ、やりがいはある。赤ちゃんが元気に生まれて「おぎゃー」と泣いた時には非常にうれしく思う。

○千葉座長

医療事故があり、補償制度もできたと聞いている。

〔回答：竹下さん〕

少しは安心になった。一時、産婦人科を専攻する学生も増えたのですが、また減ってきている。

○千葉座長

助産師についてはいかがでしょうか。

〔回答：外館さん〕

助産師になる人が少ないという意味ではない。沿岸部は県立病院がほぼ周産期を担っているのだが、県立病院に就職する助産師が少ない考えられる理由の一つとして転勤があげられる。例えば久慈病院の場合 18 人いるが、久慈の方と結婚し生活本拠地となる方が 7 人なので、あと 11 名は他の地域なので地元に戻りたい。それが県立病院の特徴である。そこをどのように魅力的に変えていくかということ。

例えば、新卒の助産師が配置になった場合、分娩件数が少ない状況であれば、助産師をやりたくてなっているので、学んできた助産師のライセンスを生かせず嫌になる。助産師がいないわけではなく、この沿岸部の場合は県立病院で助産師確保が難しく大変である。それを県立病院だけの問題にせず、岩手県の問題として大きく取り上げて考えていただきたいのが、県立病院に何十年も勤めた私の意見。

久慈病院で助産師として竹下先生ともお仕事させていただいたが、当時は 1 月に 100 名のお産があった時期もあった。お産というのは日中ではなくどうしても夜に多い。

病院の特徴とすると、お産する人が少なくなると 1 病棟の中に産科だけを置けない状況になる。ベッドを空けておくわけにはいけないので、脳外科や整形が入る。そうなったとき助産師もお産にだけにかかっていけない状況となるので、モチベーションが下がることもある。

安全を考えた時、どうあればいいかという問題とかが現場ではたくさんあるが、先程いたずらに不安を煽らないで欲しいと言ったのは、病院側としては少ないマンパワーで考えてやっているときに、「久慈病院では産めない」とかが強調されるのではなく、働いている職員からすると、こんなに頑張っているのにという気持ちになってしまうという意味で話をした。

産婦人科の医師がもっときてくれれば良いのだが。竹下先生は 2 人とおっしゃったけど、帝王切開となれば先生達の負担も考えると 3 人位でローテーションを組める位でないと、長年の助産師の経験から先生方の負担が大きいと思う。助産師になる人が少ないのではなく、なりたい人、なる人はいるが県立病院として確保が難しい。そこを是非ご理解いただきたい。

○千葉座長

医師の偏在という話がありました。内陸に多く集まるのが、内陸出身者が多いというのも要因になっている。竹下先生のように久慈市の出身で、地元で医師をするという方を沿岸地域からもっと出していかなくてはいけないなと思っている。県立病院に勤めていると転勤も大きなネックになって、特に女性のライフステージを考えるとどこで自分が生活して、子供を育てていくかというのも大きな問題になると思う。転勤ということについて、教職員のご経験がある小西先生にお伺いしたい。転勤をしなければいけない仕事でライフステージを考えた場合に、どんな考え方、そしてどのように乗り切っていけばいいのか。

○小西議員

安心して子供を産み育てるというテーマとなると、教職員が転勤するときには、まず、病院が近いかどうかでどこに住むかを決めている。子供を産み育てるとなると、若い頃は病院があるところという考えが大きいと思う。

結婚して子供が生まれると、働き方に大きく影響してくる。休みもとれず、働き詰めであれば

どんだん子供は減っていくと思う。いまこそゆとりをもった働き方に変えていくべきと考える。県職員の女性から、周囲に迷惑をかけられないから、妊娠したことを安定するまで言えないという話をされたことがある。流産を経験した人が何人もいた。教職員も人が足りないが、そういう働き方を変えていかなくては子供の未来は良い方向に向かない。看護師は夜勤も多く最たるものだと思う。是非、県として働き方を改めることを言っていかななくてはいけないと思う。

久慈地域の周産期医療について先生から話があったが、そういったことについて地元議員はもちろんだが、私も、助産師の力を是非活用するようにと何度も言ってきた。助産師の成り手が県立病院に少ないという話もあったが、労働環境等をもう少しよくなるように変えていくことで、助産師を増やしていく。そういうことをやっていって、助産師の力をいただきながら、良い方向にもっていけたらと思う。

○千葉座長

助産師の転勤が大きなネックになっているとのことだが、外館さんはどのように転勤を乗り越えてきたのか。ご家庭もあると思うが。また、その転勤を理由に県立病院に助産師が集まりにくくなる現状を打開できると思われるか。

〔回答：外館さん〕

打開する方法となるとわからないが、一番の願いは県立病院だけでは難しい状況であるため、皆さんのお力でどうにかならないかと思う。あとは助産師の出向システムの活用もあるが、岩手県の場合、例えば、岩手医大や盛岡赤十字病院から助産師を困っている県立病院に派遣してもらうこととなると、設置母体により給料形態が違うことや、住む場所の確保等、いろいろな違いがある。例えば近くであれば青森県でやっているようだが、誰がリーダーシップを発揮してやっていくか、そこをコーディネートする人がいなければならないが、岩手県の場合はコーディネーターも少ない。

○千葉座長

今日、出向システム等初めて耳にした議員も多く、お話を伺って良かったと思った。どうしても県立病院に助産師を増やせるかという頭になってしまうので、そういったシステムがあるということをご紹介いただき、凄くありがたいと思った。

○千田議員

今日お話を伺い、保健師さん達のお話の中で、子供を2人3人と産んでもらう為には妊娠届の時のお母さんとの関係を凄く大事にしているという話があった。安全に産むこともそうだが、様々な悩み、問題を抱えている。その時に、専門家の皆さんに話を聞いてもらえるというのは、一番大事な仕事してもらっていると思う。普代村では1人で頑張っていると聞いたが、少子化の中だからこそ、ここを増やしていかないといけないと思う。現状を2人からお聞きしたい。

〔回答：金澤さん〕

洋野町の保健師1人は課長職の管理職で、現場で働いている者は9名いるが、母子保健だけをやっているわけでない。産まれる前から亡くなるまでの全年齢の部分の仕事をしている。母子保健というものは人生のスタートなので大事である。

洋野町では、必ず保健師が面接をして母子保健手帳を発行しているが、時間をかけたくても、別な仕事もあるという悩みもある。もっと増員して欲しいとは思いますが、それぞれの市町村の事情もある。

普代村は同じ管内で人口が少ないところとはいえ、保健師が1人という現状を聞き、同業として本当に大変なことと考えた。是非、普代村には複数置いて欲しいと思う。母子保健は本当に大切だと思う。

〔回答：佐々木さん〕

保健師1人でやっているが、人口が少なくてもやらなくてはいけない業務はどの市町村も同じである。重点的に時間をかけたい方がいても、他に手が回らなくなってしまう。

保健師を募集しても普代村に来ていただけない現状がある。今でも募集はかけているので、是非どなたかいればすぐにでも採用したい現状だ。

母子保健は最初の所であり、そこから始まっていく。力をいれていかななくてはならないと思う。私も保健師であり母親でもある。保健師が1人であるため、残業もあり家に帰るのが遅くなる。そうすると子供達にも申し訳ないなと思う。

母親と一緒に住んでいるので、母親の手を借りられることができ、この仕事を続けていられている。夫婦だけでは今の仕事は続けられない。職場で保健師が1人だと休めないという状況だが、母にお願いし仕事に来ることができるので感謝をしている。

仕事をしていて妊娠・出産することは本当は嬉しいことなのだが、職場に迷惑かけてしまうと思うと、心から喜べないという自分がある。職場全体とか周りが本当に良かったと祝ってもらえる環境、子供が風邪を引いた時など、休むことが自然とできる環境ができればいいと思う。

○千葉座長

最初の所で神田さんから問題提起をいただいた。お母さん達がしつけ、発達に関することの悩み、それは夫婦間、姑、お母さん自身の悩みに起因するところが多いとお聞きした。出会いの所や、どのように周産期医療体制を整えるかというお話が大半となってしまったが、妊娠中と産んだ後で、私のことを振り返っても前と後では全く違う。産んだお母さんを一人にしないということが大事だと思う。お母さんの悩みに寄り添う為に、どのようなことが必要だと思われるのか、その点についてご提言いただきたい。

〔回答：神田さん〕

久慈市では、当事業所で行っている集いのひろばの他に、直営の子育て支援センターがある。どちらにも遊びにくる親子がいる中で、「お子さんに発達障害があるのではないか」、また、「家庭で虐待等の傾向があるのではないか」など、気になる親子がいる。そのような場合に、どう早く察知して、どう関わりをこちらから持っていくかということに力をいれている。お話を伺って、少しずつ入り込んでいって、難しいケースだと保健師に繋げることにしている。保健師は久慈市でも充足されている状況でないと思うが、専門の部分を保健師にお願いして、普段の愚痴等を私どもでフォローできればと考えている。

先程転勤の話もあったが、来られるお母さんのほとんどが転勤族であり地元の方が少ない。お母さん方からは、「このような場があって良かった」、「他のお母さん達との交流を持てて良かった」と言っていた。

少しでもそういう場が増えていけば、お母さんの気持ちとか子育てに繋がるシーンが充実していくのではないかとと思う。

◆ 閉会

○千葉座長

予定していた時間を超過いたしました。本日皆さんからいろいろなご提言、そしてご意見をい

ただいた。特に男女の出会いの場を考えると、コミュニケーションが疎遠になっており、自分自身でなかなか見つけることができない。見つけるという意味を感じないという方が増えてきているというか、実際そういう人がいるということを目の当たりにして、これも人口減少の最初の入口になってしまうのかなという認識をした。

男女の出会いの場、産んだお母さん達の出会いの場、そういったものを作っていくため、どのような方策があるかのアイデアをいただいた。環境、労働、教育環境、経済的なサポート保育の無料化をはじめとして、子育て支援のありかた等、様々なご意見、ご提言を本日はいただき、ありがたく思っている。

まずは、お母さんの悩みを受け入れ、お母さんが育児を楽しめる環境を多方面から作っていかねばいけない。どこから手を付けて良いかわからないというのが現状だと思う。

ユネスコがESDという新しい概念を発表している。それは世界的規模でおこる環境や自然、経済等の課題を全部自分のことと考え解決するために、この地球上の人達が1人1人取り組んでいくことが大事だという概念をユネスコが話している。

子供が、岩手、久慈、日本、世界の未来を創っていく大事な存在というのは皆さんもわかっている。一方で子育てに対する支援に対しては、子育てをしていない世帯への支援も必要ではないかと。子育てしている人だけ利益があるようなものではという批判的な意見もいただいている。ただ、10年20年30年後を考えたとき、一番の宝は何か。それは地域の文化、伝統、そういったものを受け継いでいく子供達にほかならないと思う。全て子供達のためにということを考えて、いろんな体制を整えていくことが一番大事にしなければいけないことではないかと皆さんの話を伺って感じた次第です。

今日ご参加いただきました皆様、お忙しいところありがとうございました。今日いただいたご意見は私たちの議会活動に生かして、できるところからはじめさせていただく。その際またいろいろご意見等伺いますので、一緒に考えていただければと思う。

以上をもちまして本日の意見交換会を終了させていただく。なかなか、皆さんまんべんなくお話を聞くことができず、拙い進行であったことを最後にお詫び申し上げて終わらせていただく。本日は本当にありがとうございました。